

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 5月22日 11:21AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 47,000~63,800 円
(TOPIX) 3290~3950

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 46,000~50,500 ドル
(S&P500) 6300~7500

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~29,800
(ナスダック総合) 21,000~26,800

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000~100.650

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

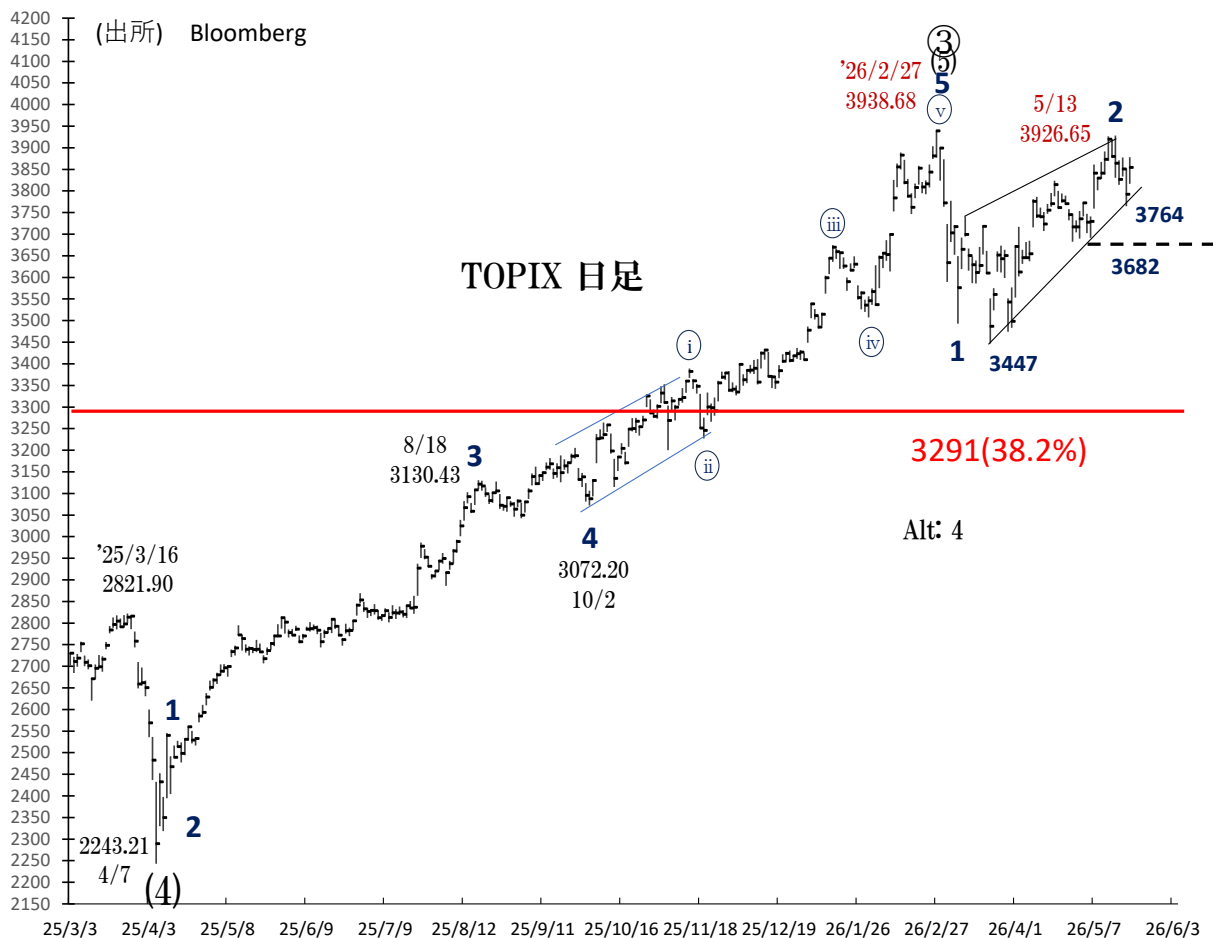
日経平均はプライマリー第③波の最終盤にあり、短期的にも終わる可能性があります(既に終わったかもしれません)。

2020年3月以来の上昇チャネル上限は今週 59,219 円(来週は 59,274 円)にあります。それを週末値で下回ると、最終上昇波の「スローオーバー」が確認され、上昇第③波の終了及び、調整第④波の開始が示唆されます。

3月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けることになるでしょう。

高値示現後は、年末～来年3月のサイクル終点に向け株価は下落基調を迎えるでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。



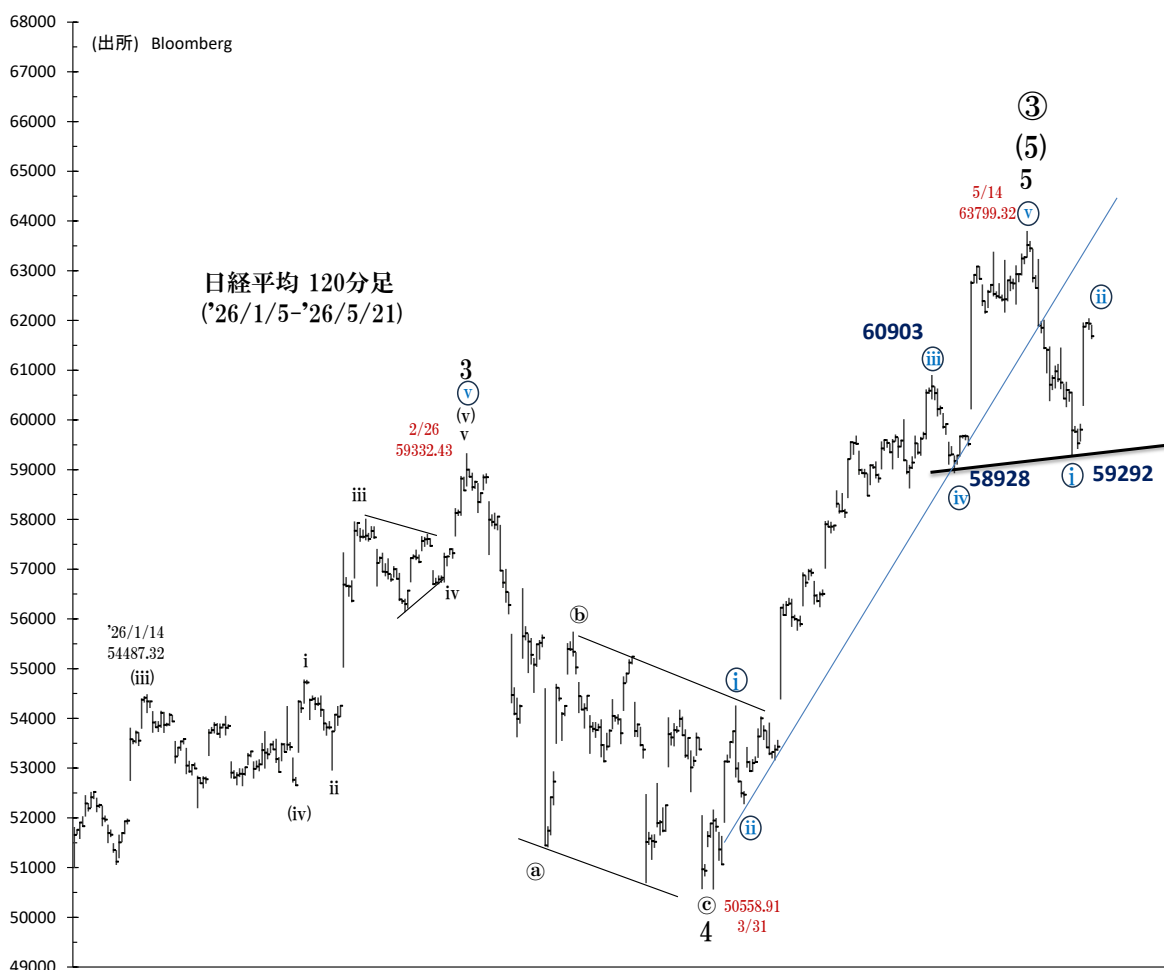
[TOPIX]

TOPIX の最高値は 2 月 27 日(イラン戦争開戦の前日)に付けた 3938(時価総額 1326 兆円)であり、日経平均に先んじています。時価総額加重型の TOPIX は景気の先行指標のひとつであり、イラン戦争からの企業業績悪化・景気後退リスクに敏感になっています。2 月高値から既にプライマリー④波に入った可能性があり、そうであれば、④波の調整規模はプライマリー①波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになるでしょう。

2 月高値と 5 月高値、これらによる「ダブル・トップ」が完成した可能性があります。

注目すべきは、5 月 14 日の東証プライム売買代金が過去最高(12 兆 376 億円)に膨らみながら、2 月高値を上回っていないことです。この日からは 3 日続落となっており、需要を上回る強い売り圧力がかかっていることがみとれます。2 月の一番天井に対し、5 月の二番天井は「バイニング・クライマックス」だった可能性が高いでしょう。

3 月 23 日安値(3447)と 5 月 1 日安値(3691)を通るサポートライン(3796、1 日当たり 8.72 上昇)を、終値で下回ると、第 3 波入りの最初のトリガーが引かれます。ひとたび下降第 3 波が始まれば、それは 3447(3/23 安値)を早々に下回り、さらに黄金比サポート[3291]を試すでしょう。



[日経平均]

50,558 円(3/31 安値)からのマイナー級第 5 波による上昇は、63,799 円(5/14 高値)を以て完成した、とみられます。5 月 20 日に一時 59,292 円まで下げましたが、この時点で最高値からの下げ幅は 4507 円、下げ率は 7%と、いずれも 3 月末からの上昇では最大のカウンター動きとなっています。

翌 21 日の急反発は、マイニュート級のマル ii 波とカウントされます。この日の高値(62,043 円)は、前日までの下げ幅の 61.8%戻り[62,078 円]に相当しています。下降トレンド中のリバウンドは終わったか、終わりつつあります。なおマル ii 波がまだ続いたら 78.6%戻り[62,835 円]付近を試すでしょう。

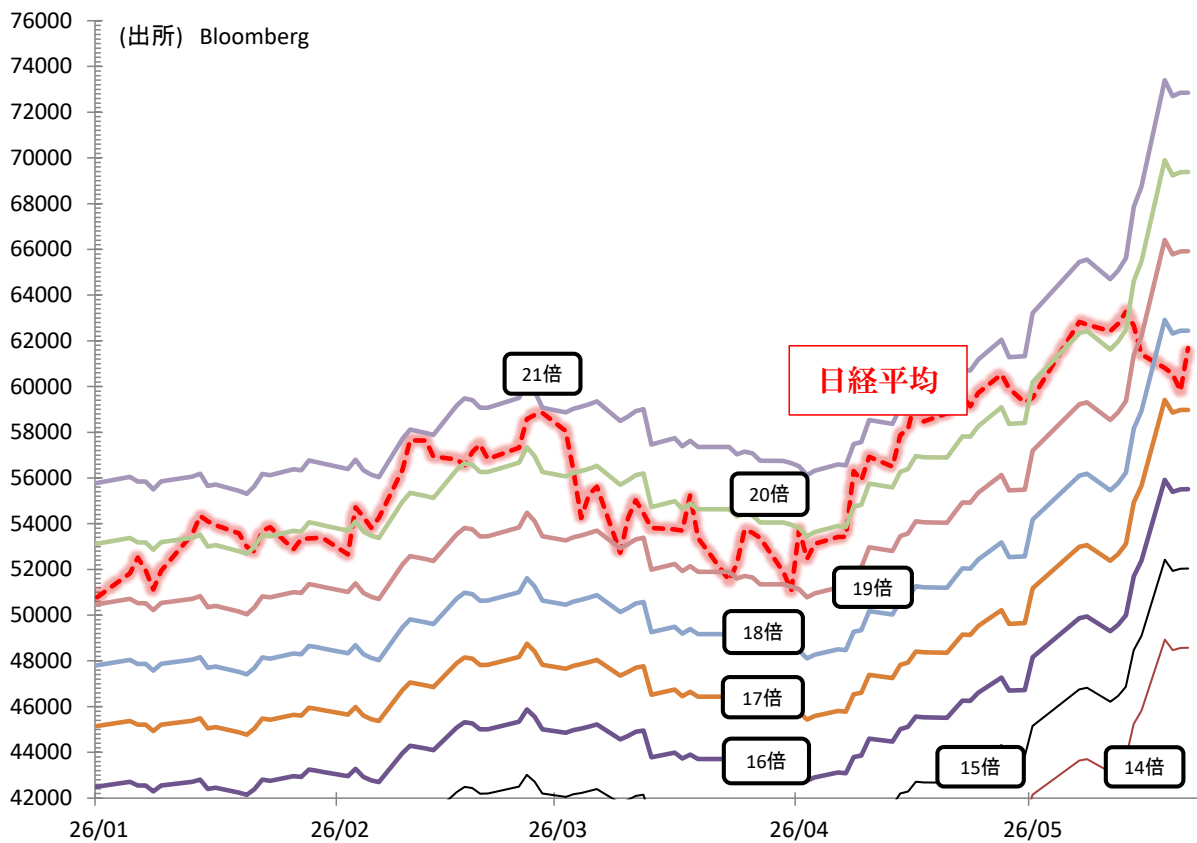
マル ii 波が終わると、マル iii 波による下落トレンドが始まります。

59,292 円を割ると 4 月中旬からのヘッド・アンド・ショルダーズから下入れ開始となります。

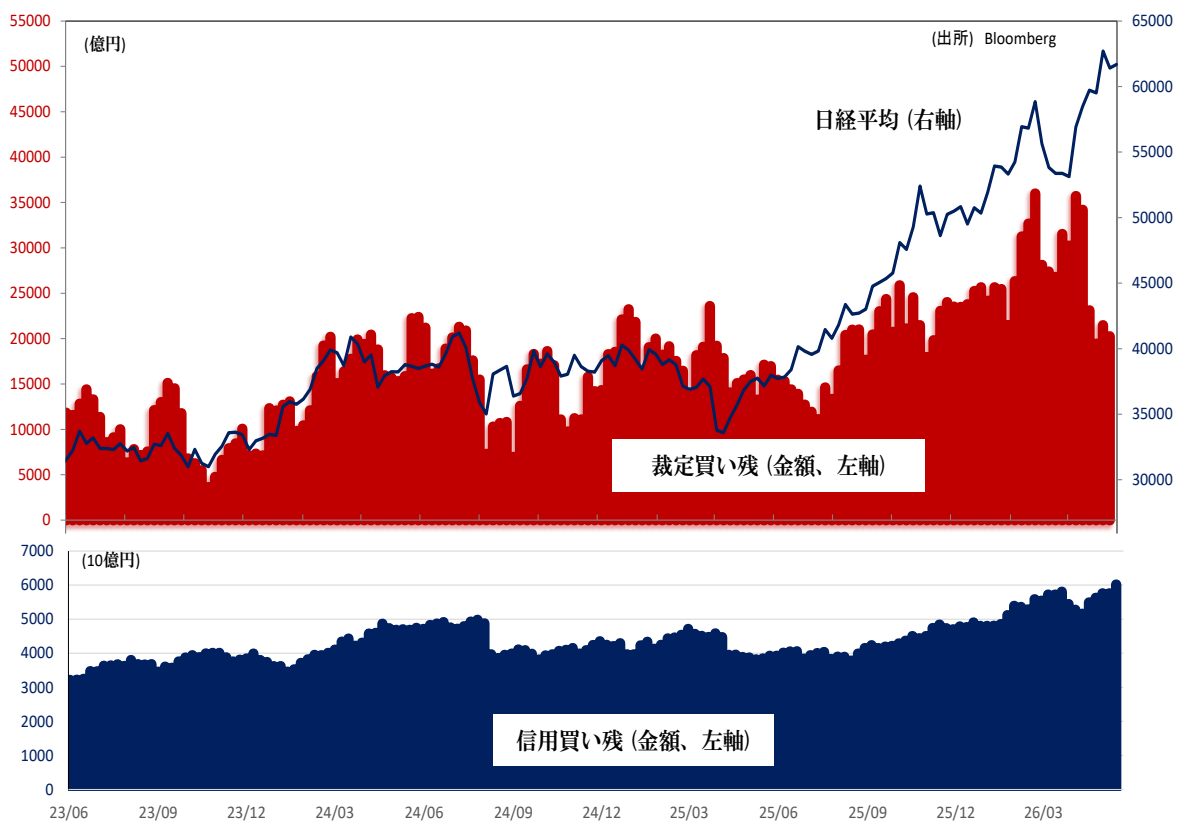
そして終値が 58,928 円(レッサードイグリー・マル iv 波安値)を下回ることをトリガーに、マル iii 波の急落は加速するでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]

5 月 21 日の日経平均予想 PER は 17.78 倍、予想 EPS は 3469 円です。過去最高は 3495 円(5/18)。



裁定買い残と信用買い残] (5月15日時点)



NYダウ・S&P500



【NYダウ 30日足 エリオット波動分析】

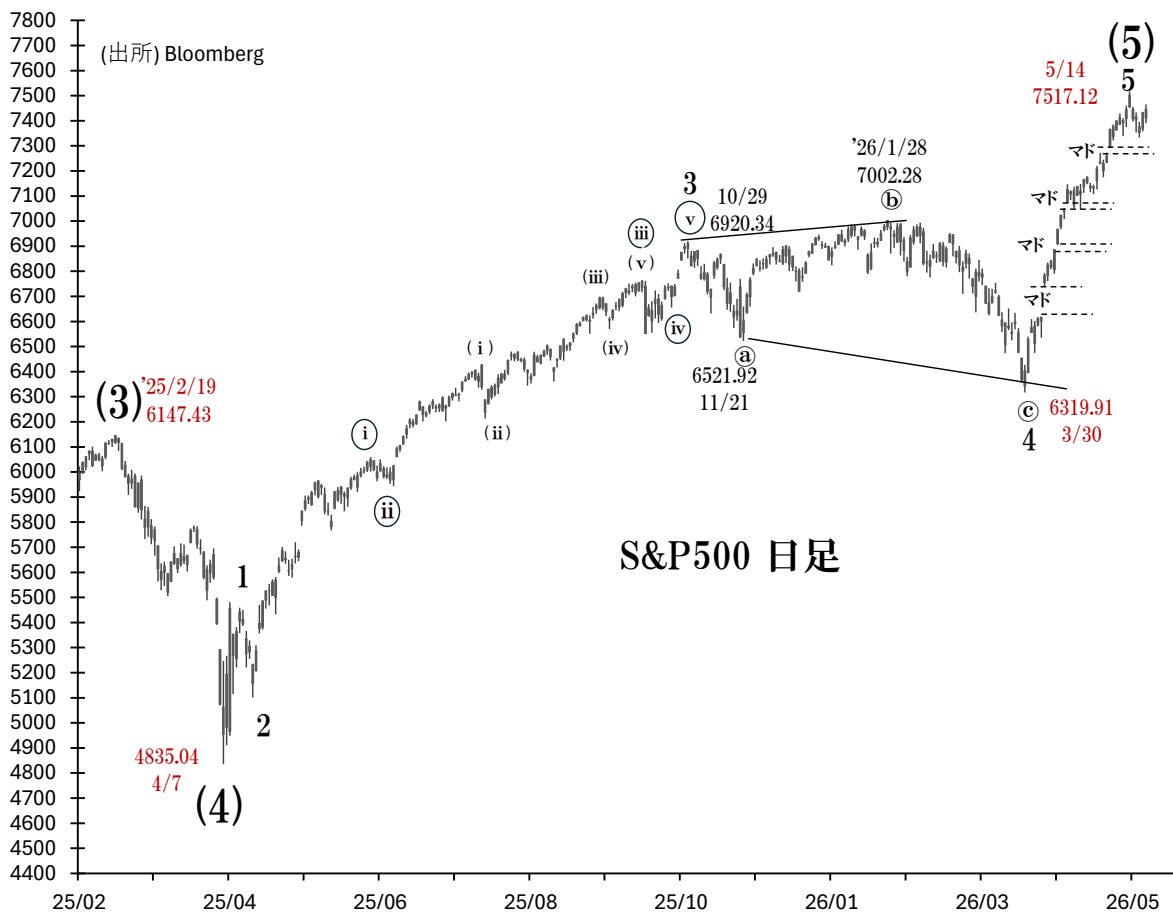
S&P500、ナスダック 100 などの最高値更新にかかわらず、NYダウが2月高値(50,512ドル)を更新しないのなら、米株市場は26年前の「韻を踏む」でしょう。この場合、今年の「セル・イン・メイ」は、例年以上に重要な意味を持つこととなります。

2000年ITバブルからのアナロジー(類似)からは、NYダウが最高値50,512ドルを超えることはありません。第2波は目的的にも終了し、まもなく第3波による急落が始まるでしょう。49,235ドル(5/20安値)を割ると第3波開始の最初のシグナル発動となります。第3波は、3月安値を明確に下回るでしょう。

一方NYダウが2月の高値を更新すると上記アナロジー分析は無効になります。

代替波動カウントは、3月安値から(5)波-C波の上昇にあるというもので、それを以て2020年からの「エンディング・ダイアゴナル」は完了します。

輸送株の弱気相場入りが米景気の悪化を示唆しており、そんな中でNYダウ工業株平均の上昇は持続しないでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6319(3/30 安値)からの上昇波は第 5 波とカウントされます。この第 5 波完了を以て、昨年 4 月以来の第(5)波も完了します。

第 5 波が形成される過程で 4 つのマドが空きました。5 月 6 日の 4 つ目のマドは、「エグゾースション・ギャップ」とみられ、5 月 5 日終値(7259.22)を下回るとトレンド転換が確認されます。

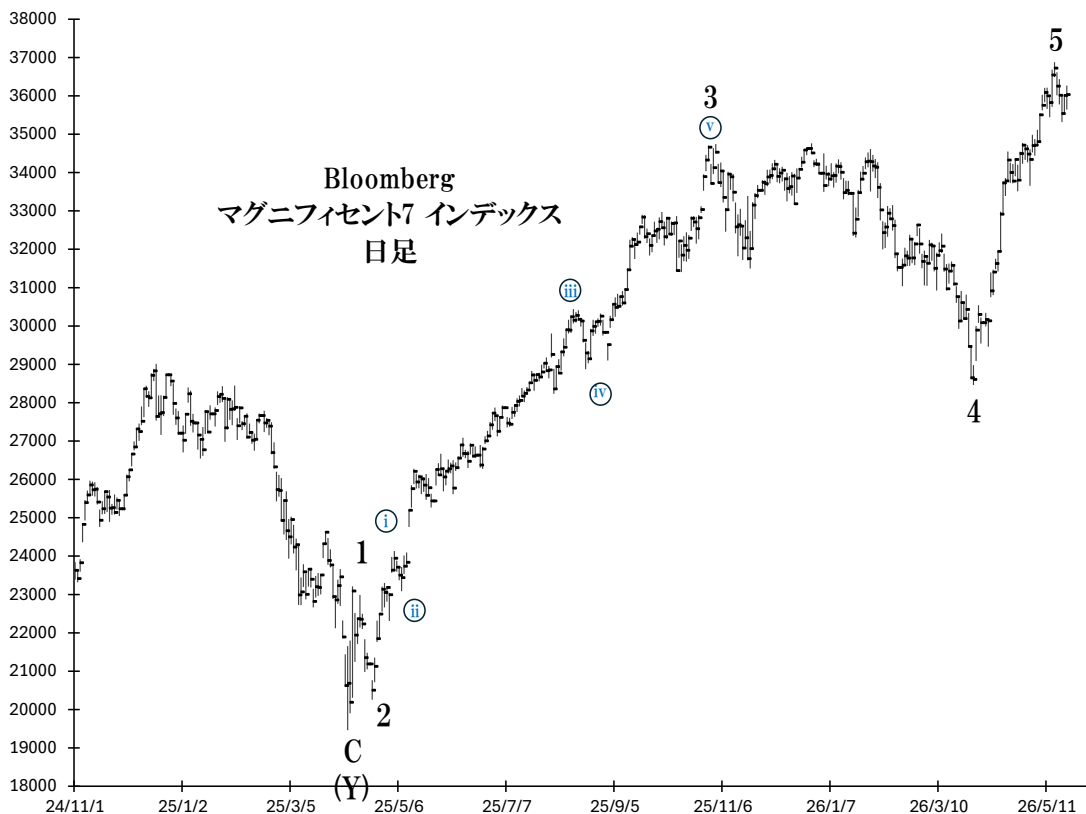
燃料費の上昇(※)が、鉄道、航空、トラック輸送会社などにネガティブに働いており、**ダウ輸送株平均**は、「(定義上の)弱気相場」に入っています。景気のパロメーターである輸送株平均の低迷は、米景気の悪化を示唆しています。

(※)全米平均ガソリン価格は 1 ガロン当たり 4.430 ドル(5/18 時点)と引き続き高くなっています(地域によっては 5 ドルを大きく上回る)。ガソリン価格が「心理的カベ」の 4 ドルを超えると、米消費にブレーキがかかる、といわれます。

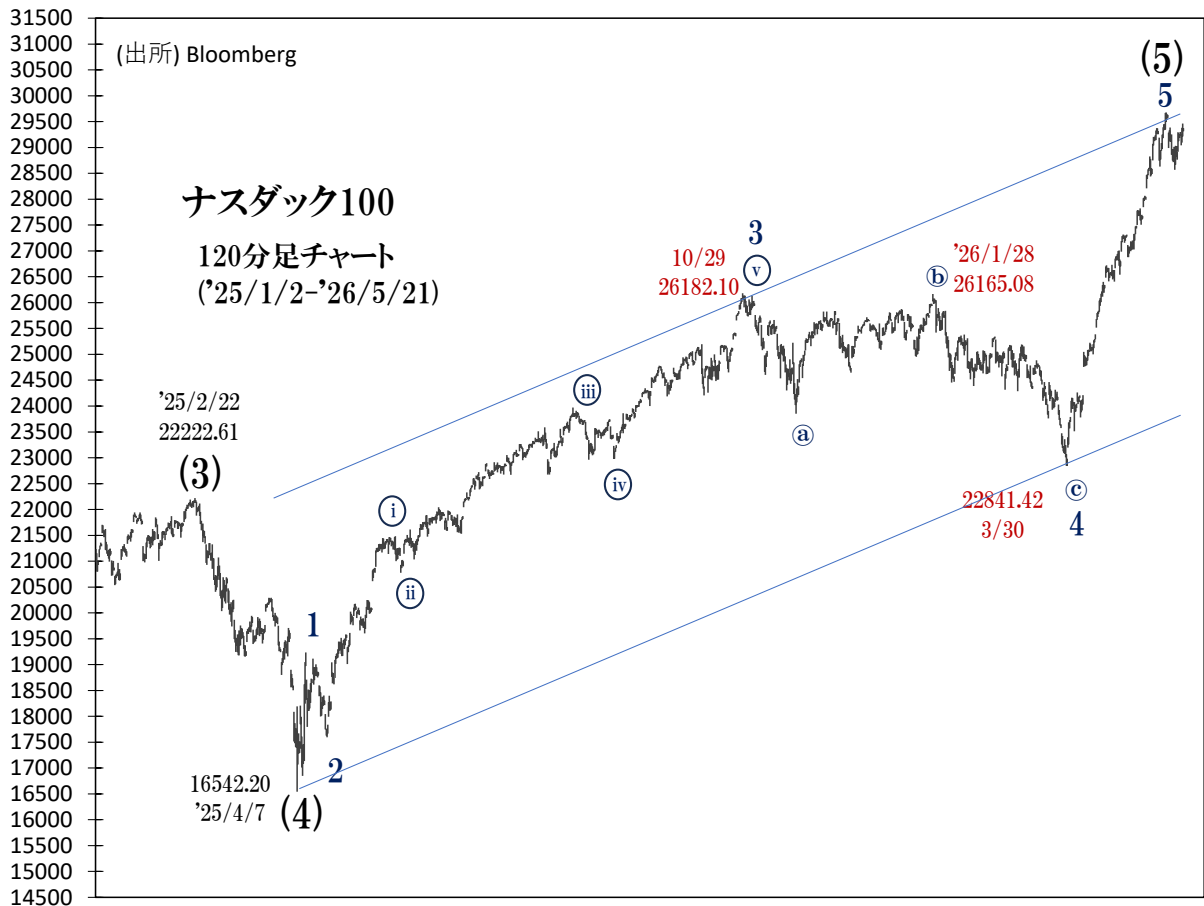
[ダウ輸送株平均] 「弱気相場」のリバウンドか



[マグニフィセント7] ピークアウト?



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

22,841(3/30 安値)からの上昇は第 5 波目に当たり、いつ天井を付けてもおかしくありません。

SOX 指数を構成する 30 の半導体株の合計時価総額は、いまや米国株全体の 13%を超えています。ナスダック 100 に対しては SOX 指数のウェイトは 20%程度、さらにエヌビディア 1 社だけでナスダック 100 内で 13%~14%を占めています。要するに、米国株の先行きは AI・半導体株次第といえるでしょう。

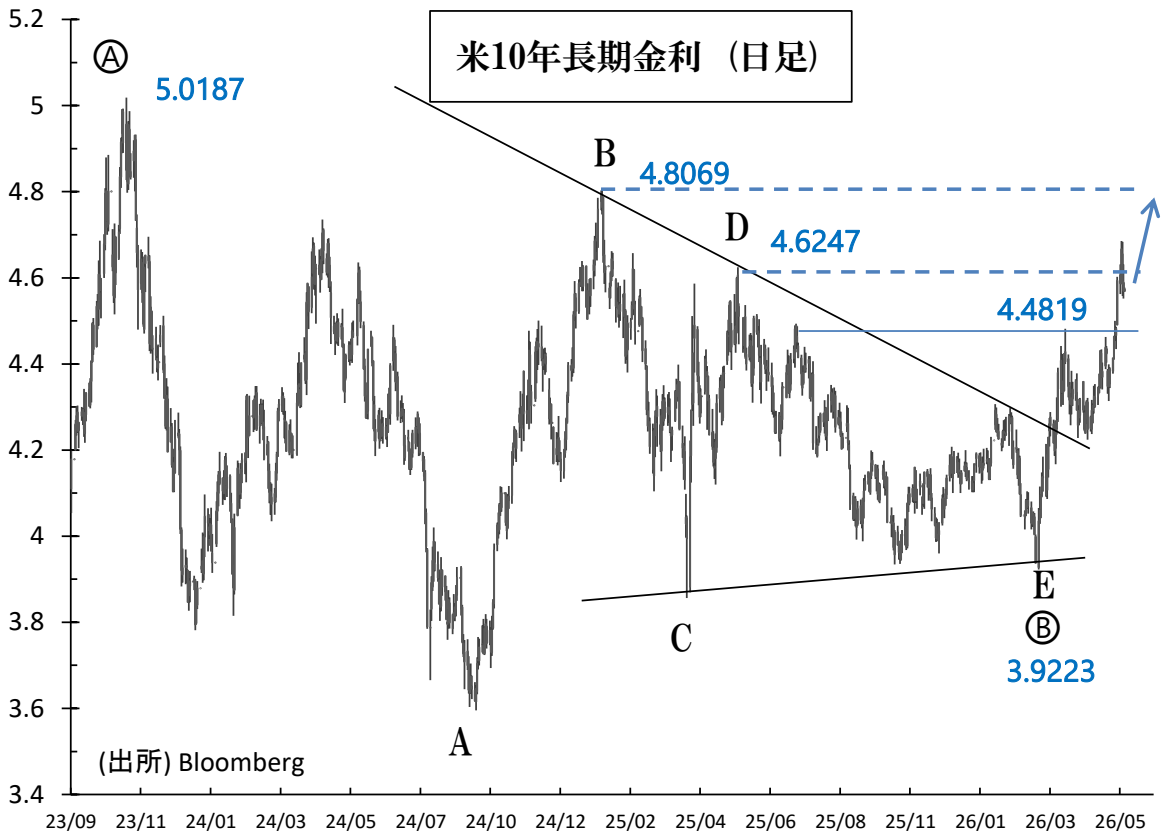
筆者は後述のように、米長期金利が今後も大きく上昇する可能性をみています。もしそうなれば、AI・半導体株のバリュエーションは低下し、株価は大きく下落していくでしょう。

米 10 年長期金利は、23 年 10 月(5.0187%)以来の大型三角保ち合いⓑ波を、今年 3 月の 3.9223%を以て完成しました。そこからはⒸ波の金利上昇とみられます。

5 月 19 日に一時 4.6853%まで上昇しました。次に目指すべき節目(4.8069%)は、短期的にも試されるかもしれませぬ。

Ⓒ波は遠からず、5.0187%をも大きく上回るでしょう。これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

[米 10 年長期金利] 短期的にも 4.8%を試すか



[米 10 年実質金利] 「警戒ライン」を明確に超えた



米 10 年実質金利は、株式市場にとって歴史的な「警戒ライン=2%」水準を明確に上回りました。実質金利 2%水準超えの影響は、ハイテク・グロース株に顕著に表れ、強い下落圧力となることが珍しくありません。また多くの場合、市場ボラティリティの上昇(≒株価急落)がみられます。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在 1ドル=142 円程度です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準よりも極端な過小評価が続いています。さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

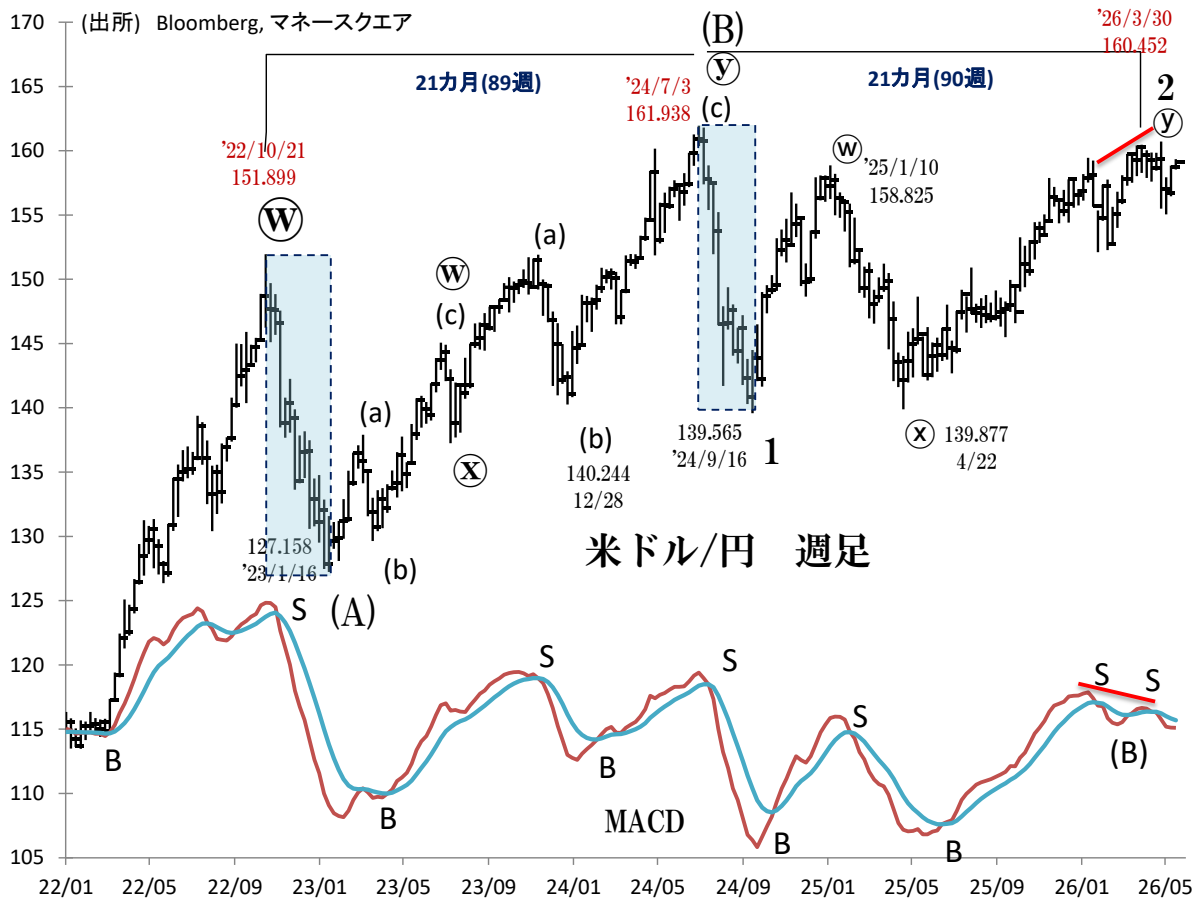
このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた 20 年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。

日本の実質金利は着実に上昇

5 月 22 日発表の日本の 4 月コア CPI は 1.4%でした。政策金利 0.75%から差し引いた実質金利はマイナス 0.65%です。もっとも、1 年前(25 年 4 月)の実質金利(約マイナス 3.0%)からは大きく上昇しています。さらに実質長期金利(実質金利の先行指標)は、1 年前にプラス圏に入り、足元まで明確な上昇基調が続きます。この 1 年間、金利差縮小の一方で米ドル/円は上昇していますが、本来の相関が戻り、米ドル/円が下落を開始する時期は近づいていると思われます。



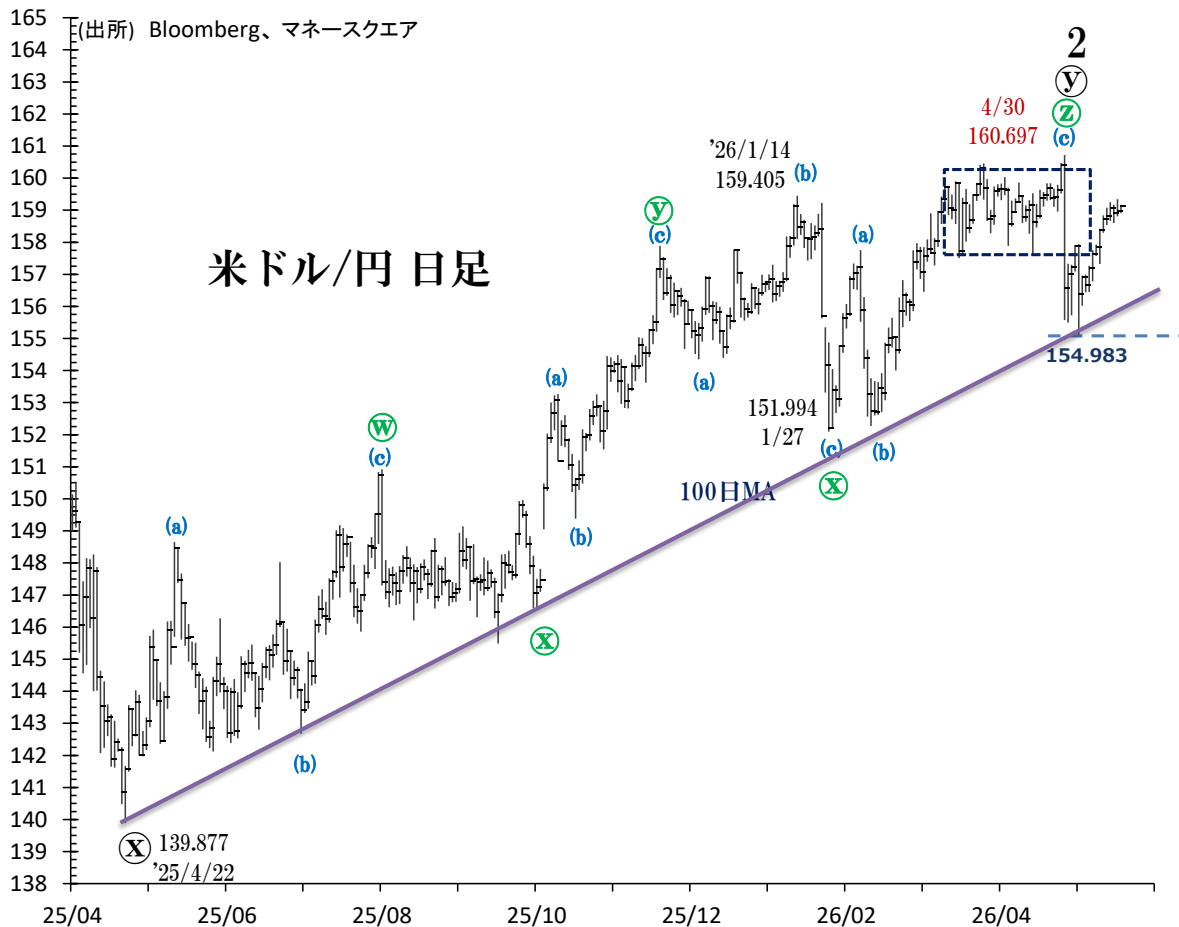
【週足 エリオット波動分析】

160.697 円(4/30)を以て、24 年 9 月からの第 2 波によるリバウンドは完了し、第 3 波が始まった可能性が高いとみています。

MACD には 1 月末に続いて 2 度目の売りシグナルが点灯しています。これはベア・ダイヴァージエンスを伴っており、通常よりも強い(信頼度が高い)売りシグナルです。

週足チャートにシャドーで示した箇所は、円買い介入後にみられた 2 度の急激な円高です。最初は 22 年 10 月～23 年 1 月の 3 カ月間に、24.741 円幅の円高となりました。次は 24 年 7 月～9 月の 2 カ月半で、22.373 円幅も円高が進んでいます。

これらのアナロジー(類似)からは、ドル/円が 3 カ月程度で 20 円～25 円下落する可能性がある、ということ。もしそうであれば、7 月までに 1 ドル=140 円に達するというシナリオが得られます。



【日足 エリオット波動分析】

ドル/円は円買い介入によって3-4月のボックスレンジから下げましたが、過去1年のサポートライン（重要線）で下げ止まり、154.983円(5/6)から反発となっています。

61.8%戻りレジスタンスの[158.51円]を超え一時159円処まで上昇していますが、目的的にも頭打ちとなる可能性があります。

重要線の足元水準は156.25円近傍にあります。156円を今後下回る動きは第3波入りを促すでしょう。この場合、短期的にも152円処へのドル安・円高となるでしょう。

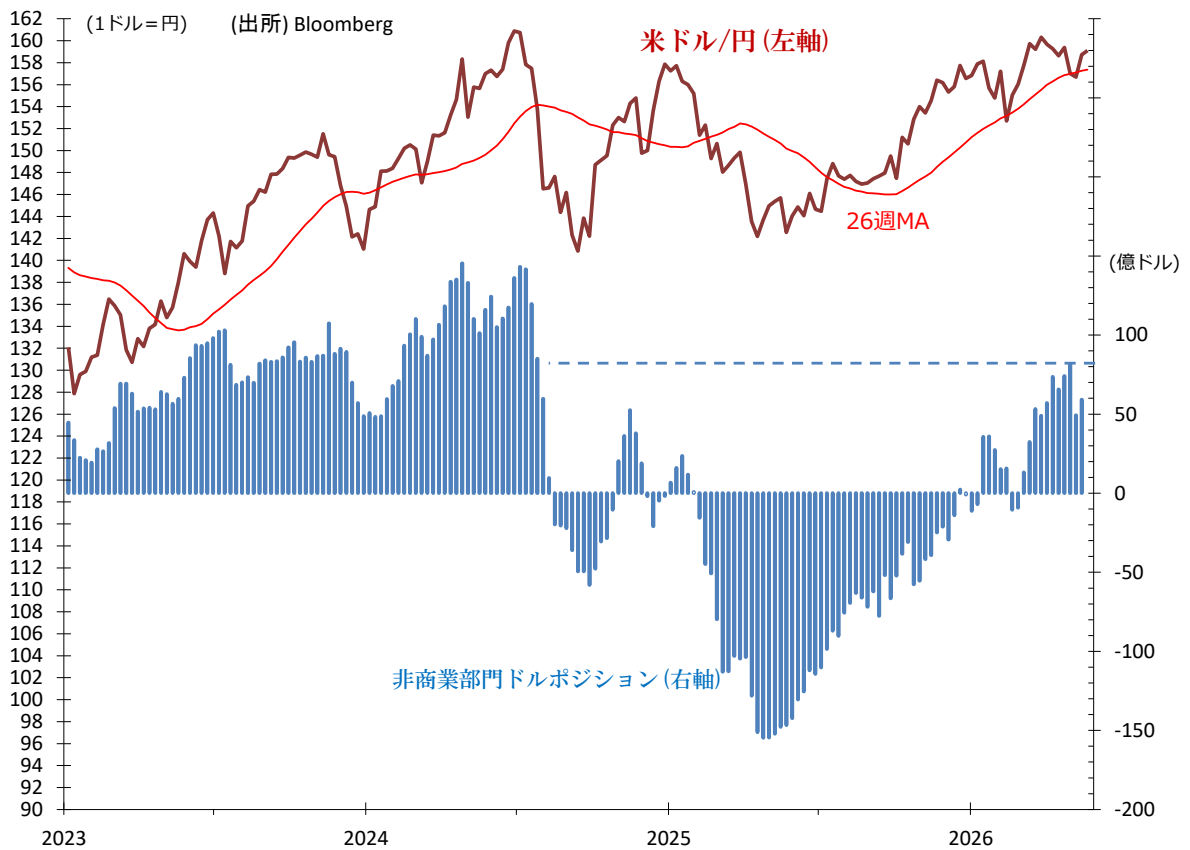
152円処への円高が示現すると、週足分析のように、1ドル=140円への円高シナリオはより現実味を帯びると思われます。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.438円]です。

円売り持ち高が2週ぶり拡大（2026年5月12日時点）

IMM 通貨先物市場において、投機筋（非商業部門）の円売り持ち高は、前週の49.25億ドルから59.14億ドルへ2週ぶりに拡大しました。



ドルインデックス (ドル指数)



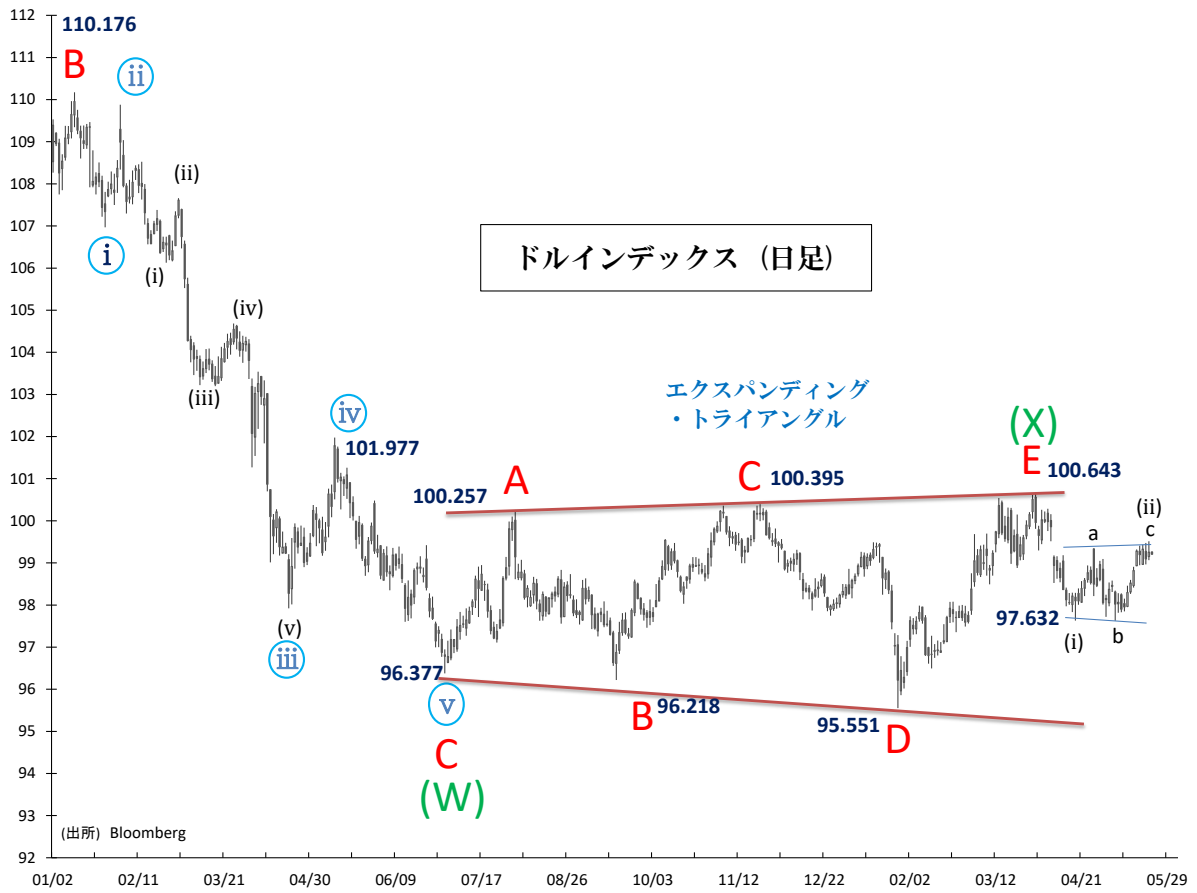
【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は、時間が経つごとに高値と安値が広がる(三角)保ち合い相場=「エクспанディング(拡大)・トライアングル」(A-B-C-D-E)の可能性が高い、とみています。

100.643(3/31)以来、中長期のドル安トレンドが展開中とみられますが、その最初の下降波・第(i)波は97.632(4/17)で終わりました。

そこからの第(ii)波による上昇は、フラット(a)-(b)-(c)を形成しているようです。97.625(5/6)からの(c)波は終わったか、終わりつつあります。5月21日には一時99.515まで上昇しましたが、マド埋め水準の99.516(4/7安値)には届いていません。

97.496を終値ベースで下回ると、第(iii)波によるドル安トレンド入りの可能性が高まります。ひとたび第(iii)波のドル安トレンドに入ると、ドル指数は今年中に95.551を明確に下回るでしょう。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
